

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	明清楽から見る江戸時代の『西廂記』故事の受容について
Author(s)	樊, 可人
Citation	中國中世文學研究 , 69 : 80 - 93
Issue Date	2017-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00043763
Right	
Relation	



明清樂から見る江戸時代の『西廂記』故事の受容について

樊 可人

はじめに

江戸時代に輸入された『西廂記』はしばしば唐話の辞書に引用されると同時に、その物語が詩作などによって民間にも浸透したことは、すでに拙稿「江戸における『西廂記』の伝来とその受容について」において、論じた¹⁾。一方、江戸時代に清国から伝来し、江戸末期から明治中期にかけて広く民間に普及した「明清樂」にも、『西廂記』故事について歌う作品が存在する。

明清樂における『西廂記』故事に関する先行研究には、楊桂香氏の「明清樂—長崎に伝えられた中国音楽」や「沖繩と長崎における中国音楽の受容と変容—打花鼓を曲例として—」、中尾友香梨氏の『江戸文人と明清樂』などがある²⁾。楊氏は、明清樂の「茉莉花」は『西廂記』の故事を取り入れており、またそれは、『綴白裘』の「花鼓曲」や『小慧集』の「鮮花調」に由来することを明らかにした。一方中尾氏は、遠山荷塘がもたらした「茉莉花」や「九連環」などの清樂が亀井昭陽一門にどのような影響

を与えたかについて考察を行った（第五章「亀井昭陽を魅了した清樂」）。

以上の先行研究によって、『西廂記』の故事が取り入れられている「茉莉花」の受容状況はある程度明らかにされた。一方、現在残されている数多くの明清樂の譜本を確認すると、「茉莉花」以外の「月花集」や「漳州曲」といった曲にも、『西廂記』と関わる部分が見られることが分かる³⁾。塚原康子氏は、『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』において、江戸後期から明治にかけて刊行された明清樂の譜本八十四種の中で、「茉莉花」と「月花集」は出現頻度がそれぞれ二番目（五十七回）と四番目（四十五回）に高いと指摘しており⁴⁾、これらの曲が広く歌われていたことが分かる。さらに時間を遡ると、享保年間に出版された『唐話纂要』にも、既に『西廂記』故事を歌う作品が収められている⁵⁾。

つまり、『西廂記』故事と関わりがありそうなこれらの曲は明清樂を考える上で大変重要な作品だと考えられる。本稿では、『西廂記』故事を含んだ曲に何か共通点があ

るのか、またこれらの曲が江戸時代の人々によってどのように受容されたのかということについて考察を行う⁶⁾。

一 「崔鶯」と「張君」

前述したように、早くも享保三年（一七一八）には、『西廂記』の故事に関する曲が見られる。岡島冠山が編纂した『唐話纂要』巻五「小曲」の部には、次の二曲が収録されている。

崔鶯

崔鶯鶯、訪紅娘。我有問上一個詳細。街坊上、許多人、講我的是非。是何人、造下了我有這本的西廂戲。艸橋驚夢何曾有、月下佳期在那裡。何人叫做張生了紅娘、那個跳在我花園裏。

張君

張君瑞、訪故友。遊學得散悶、往蒲東、訪杜曲。白馬將軍偶遊到、普救寺、武則天娘的建造。大雄寶殿高六丈、鐘鼓樓臺高又高。久聞得那寶刹巖巖、有一位高僧老師臺。借居西廂、閑遊戲耍。

一曲目の「崔鶯」では、崔鶯鶯が紅娘を訪ね、『西廂記』に描かれる場面について質問する様子があたわれる。二曲目の「張君」は、張君瑞が旧友の杜曲（曲）は「確」の誤りか）を訪ねて普救寺に泊った経緯について述べた

曲である。

冠山が中国語の教材として使われる『唐話纂要』にこの二曲を入れたのは何かしらの意図があると考えられる。それは、彼の著した『太平記演義』に弟子の守山祐弘が付した序文に次のような記述が見られるからである⁷⁾。

獨吾師玉成先生、同郷長崎之人也。少交華客、且從先師祖上野先生而習學華語、已自悟入其妙境。於貫中二書、通念曉析、無所不解。其餘『西遊記』、『西廂記』、『英烈傳』等諸家演義小説、亦皆搜抉無隱。獨り吾が師玉成先生のみ、同郷長崎の人なり。少くして華客に交はり、且つ先師祖上野先生に従ひて華語を習学し、已に自ら其の妙境に悟入す。貫中の二書に於いて、通念曉析し、解せざる所無し。其の余の『西遊記』、『西廂記』、『英烈伝』等の諸家の演義小説も、亦た皆搜抉して隠す無し。

白話小説に造詣の深かった冠山が『西廂記』を求めたところに、彼の該書に対する興味が窺える。また、当時の日中貿易の一翼を担った唐通事にとつて、『西廂記』が教材の一つであったことも関係しているよう⁸⁾。

二 「茉莉花」

現在でも中国で広く知られる「茉莉花」は、遅くとも享和三年（一八〇三）には日本に伝えられた。大田南畝

の『杏園問筆』巻二に次のような記述がある¹²⁾。

○小曲

文鮮花

好一朵鮮花、好一朵鮮花、有朝的一日落在我家、我本待不出門兼又恐怕鮮花而下
好一朵茉莉花、好一朵茉莉花、滿園的花開賽不過了他、我欲要摘一枝戴又怕看花人罵又
八月裡桂花香、九月裡菊花黃、勾引的張生跳過粉牆、好一個雀鶯々來忙把門闕上又
哀誥小紅娘、哀誥小紅娘、可憐的小生跪着半夜、你着是不開門來、我就跪到東方亮又
右、崎陽より写し来れるとて、人のみせしを写す。
時に癸亥の正月十一日、寒泉子の亭にて見し也。

大田南畝の自注によれば、この曲は享和三年に友人の岡田寒泉に見せてもらったものである。「寛政の三博士」の一人であり、朱子学の振興に努めたことで知られる岡田寒泉がどのような経緯でこの曲を写してきたのかについてはよく分からないが、朱子学を尊ぶと同時に『西廂記』などの俗文学にも関心を払っていたことが窺える。なお、曲名の「文鮮花」は、後の譜本では「含艶曲」、「抹梨花」、「茉莉花」などにも作る¹³⁾。

現存する最も古い「茉莉花」の歌詞は、乾隆年間（一七三六〜一七九五）に編纂された戯曲集『綴白裘』に収

録されている¹⁴⁾。これと明清楽の「茉莉花」とを比べると、細かい表現の違いはともかく、譜本によっては冒頭の二節を収録するだけのものもあれば、『綴白裘』の歌詞よりさらに長く、十三節となっているものもあることが注目される¹⁵⁾。

大田南畝の記録した「文鮮花」から、当時日本に伝わった「茉莉花」は少なくとも四節あったことが分かるが、後に二節や十三節で書かれた譜本が現れることから、明清楽の作者たちは曲の内容に手を加えた可能性が高いと考える。

次に、大田南畝が「文鮮花」を書き記した理由について考えたいと思う。彼の『杏園詩集』巻二に次のような詩が見られる¹⁶⁾。

城北佳人字七娘 城北の佳人 字は七娘
芳年幾日託僧房 芳年 幾日か僧房に託る
幕中巢得紅襟燕 幕中に巢くひ得たり 紅襟の燕
簾外窺看白面郎 簾外より窺ひ看る 白面の郎
艶質曾經迷下蔡 艶質 曾經て下蔡を迷はし
幽期一失憶西廂 幽期 一たび失ひて西廂を憶ふ
如令火底蓮花在 如し火底の蓮花をして在らしむれば
縦死猶生並蒂長 縦へ死するも猶ほ並蒂の長きを生ぜん

六句目は、七娘という女性が意中の人と会うことができ

ず、『西廂記』の物語を思い起こしたとうたっており、張生と崔鶯鶯が密会する話を踏まえていることが分かる。一方「文鮮花」の歌詞でも、第三、四節が張生が壁を乗り越え、崔鶯鶯と密会しようとする話を踏まえている。

『杏園詩集』は文政三年（一八二〇）に刊行されたが、日野龍夫氏によると、この詩集は刊行より十五年も前にすでに出来上がっていた¹⁷⁾。そこで、大田南畝が「文鮮花」を書き記したのは、やはり『西廂記』に興味を抱いていたからであると考えられる。

さらに時代が下ると、「茉莉花」は月琴の名手である遠山荷塘によって、より広く人々の間に知れ渡った。文政七年（一八二四）、長崎での遊学を終えた遠山荷塘は、九州の大儒である亀井昭陽を訪れ、明清楽によって昭陽一門を心酔させた。荷塘の才能に大変感心した昭陽は、彼に関する詩文を多く残している。その中に、「茉莉花」に関する記述がいくつか見られる。例えば、甥の山口士繁に送った書簡では次のように述べている¹⁸⁾。

及望之夕、雲大起、賞心大窒。哀呻間、令堂攜次郎蹇然而至。驚而延之。（中略）僕忽想先人「月琴彈月方傾」句、曰、「妹氏欲聽月琴欵。」令堂曰、「不敢請已、固所願也。」乃往而語圭師曰、「為駟也母者來、請為之一彈。至東都之日、為我甥語之、顧不如故知乎。」圭師欣然抱琴而起、乃先夏胡琴、奏「到春來」、

「九連環」。次彈月琴、歌「茉莉花」。令堂喜甚。望の夕べに及び、雲大いに起こり、賞心大いに窒がる。哀呻する間に、令堂次郎を携へて蹇然として至る。驚きて之を延く。（中略）僕 忽ち先人の「月琴を月に彈ずれば 月方に傾かんとす」の句を想ひ、曰く、「妹氏 月琴を聴かんと欲するか」と。令堂曰く、「敢へて請はざるのみ、固より願ふ所なり」と。乃ち往きて圭師に語りて曰く、「駟也の母為る者来たり、之れが為に一たび弾かんことを請ふ。東都に至るの日、我が甥の為に之れを語れば、顧に故知の如くならざらんや」と。圭師 欣然として琴を抱きて起ち、乃ち先ず胡琴を夏ち、「到春來」「九連環」を奏す。次いで月琴を弾き、「茉莉花」を歌ふ。令堂喜ぶこと甚し。

月見の夜に、山口士繁の母親と彼の弟が昭陽のもとを訪れた。昭陽が月琴を聞きたいかと訊ねると、士繁の母は以前からずっと聞きたかったと答えた。そこで昭陽は荷塘を招き、胡琴を弾かせた。その際荷塘は月琴を弾きながら「茉莉花」をうたった。

また、昭陽は「圭上人鼓琴」において、荷塘の月琴について次のように詠じている¹⁹⁾。

圭公鼓月琴 圭公 月琴を鼓し
引我蘓州去 我を引きて蘇州に去かしむ

失却本来真 本来の真を失却し
昏々不知處 昏昏として処を知らず
鈴翁休咎我 鈴翁 我を咎むるを休めよ
奪魄醉胡琴 魄を奪はれ胡琴に酔ふと
請見天庭樂 請ふ 天庭の樂を見しめんことを
無非海外音 海外の音に非ざる無し
小倡雖非雅 小倡 雅に非ずと雖も
受之華夏人 之れを華夏の人より受く
本邦嘈囀曲 本邦に嘈囀の曲あるも
金屎不同倫 金屎たぐも 倫を同じくせず
古樂雖洵美 古樂たぐも 洵に美しと雖も
不聞知夏音 夏音を知るに聞せず
吾憐小詞曲 吾 憐む小詞曲の
有益藝文林 芸文の林に益有るを
吾門二三子 吾が門の二三子
先學九連環 先づ学ぶ九連環
一曲譜孛字 一曲 多字を譜んじ
放歌非等閑 放歌 等閑に非ず
日我初請曲 日に我 初めて曲を請へば
先歌茉莉花 先づ歌ふ茉莉花
屢聽頻得益 屢しば聴きて頻りに益を得たり
不獨悅皇夸 獨り皇夸を悦ぶのみならず

昭陽は、古楽は実に良いものであるが唐音の学習には役に立たないのに対し、明清楽は唐話の習得に有益である

哀告小紅娘、可憐小生跪到半夜。你若是不開門、跪到東方日亮乎。

後に遠山荷塘は江戸に移ると、明清楽を広めつつ、朝川善庵や宮沢雲山等の前で『西廂記』の講義を行い²²⁾、自ら訓訳した『診解校注古本西廂記』を出版しようとした²³⁾。『花月琴譜』に「茉莉花」が二節しか収録されていないのに対し、『嫦娥清韻』は『西廂記』故事を歌う四節目まで収録していることから、遠山荷塘の『西廂記』に対する興味が窺えるだろう。

現在中国で歌われる「茉莉花」の内容はすでに『西廂記』と関係がなくなっている。これに対し、江戸時代の人々は「茉莉花」と言えば、『西廂記』を思い浮かべたであろうと思われる。

三 「月花集」と「漳州曲」

譜本によって「茉莉花」の曲名や内容、節の数に違いがあるのと同じく、「月花集」には「剪剪花」、「紅綉鞋」、「漳州月花集」という別名があり²⁴⁾、最も少なくても一節、最も多いもので十節から構成されている。

例えば、『花月琴譜』の「月花集」は次のようである。

好一雙紅綉鞋、^纏梅花正月裏開。句引張生跳過粉牆來、你跳過來、我的小快快。又

という。また詩の末尾では、荷塘が自分のために「茉莉花」を歌ってくれたと述べ、それを繰り返して聴くうちに、しばしば得るものがあつたと詠じる。この他昭陽が岡子究と山口士繁に送った書簡には、門生から子供まで「茉莉花」を勉強し、歌ったことが記されている²⁵⁾。
自ら小説を書いたことがある亀井昭陽は、小説や戯曲等の俗文学に興味を抱いていたと考えられる²⁶⁾。そして、遠山荷塘が歌った「茉莉花」は昭陽に「屢しば聴きて頻りに益を得たり」と感じさせたことから、本曲には『西廂記』の故事が含まれていたのではないかと想像される。その裏付けとして、現在関西大学に所蔵されている『嫦娥清韻』が挙げられる。

遠山荷塘の著作の一つとされる『嫦娥清韻』は「月琴」、「度曲笛七調」、「度曲笛七調図」、「拍版」、「提琴」、「笛色字譜」、「側注国字例」、「曲譜并曲詞」の八項に分かれており、「算命先生」をはじめ、「茉莉花」、「九連環」等の曲を十二首収録する²⁷⁾。

その「茉莉花」には次のようにある²⁸⁾。

好一箇茉莉花、滿園的花兒開賽也不過他。本待要採一枝、又恐怕栽花人罵。
好一朵鮮花、有朝有日落在我家。本待早出門、又恐怕鮮花兒落。
八月裡桂花香、九月裡菊花黃、勾引的張生跳過粉牆。
好一箇崔鶯々、花刺と門関兒上乎。²⁹⁾

これに対し、遠山荷塘の『嫦娥清韻』が収録する「剪剪花」には以下の十節が載せられている。

一雙紅綉鞋、噯呀、梅花正月裡開、噯々。勾引張生跳過粉牆來、你跳過來、我的小快快、噯々。
二雙紅繡鞋、噯呀、杏花二月裡開、噯々。二人房中蒲竹那門牌、你搬過來、我的小快快、噯々。
三雙紅綉鞋、噯呀、桃花三月裡開、噯々。佳人房中喫撮那螃蟹、你拍開來、我的小快快、噯々。
四雙紅綉鞋、噯呀、薔薇四月裡開、噯々。四箇童生考着那秀才、你入紅門來、我的小快快、噯々。
五雙紅綉鞋、噯呀、石榴五月裡開、噯々。佳人後園割着那菲菜、你着根來、我的小快快、噯々。
六雙紅綉鞋、噯呀、荷花六月裡開、噯々。船到江中不得那攏來、你着浪大、我的小快快、噯々。
七雙紅綉鞋、噯呀、鳳仙七月裡開、噯々。張生死了買致短棺材、你要欲壞了腎、我的小快快、噯々。
八雙紅綉鞋、噯呀、木犀八月裡開、噯々。八十歲公と吃撮那長菜、你好咬長、我的小快快、噯々。
九雙紅綉鞋、噯呀、菊花九月裡開、噯々。三歲孩童打着油瓶蓋、你著盪出來、我的小快快、噯々。
十雙紅綉鞋、噯呀、芙蓉十月裡開、噯々。陽山百過著竹鶯台、你若下來罷、我的小快快、噯々。

歌詞の内容を見ると、各節全て教え歌の形になっており、

一月から十月までの各月を代表する花を挙げながら、『西廂記』故事を踏まえつつ男女の恋をうたっている。特に第一節には『花月琴譜』と同じく例の「張生跳牆」の場面が詠み込まれていることから、この故事が明清楽において主要な題材の一つであったことが窺える。

一方、第七節に現れる張生は腎臓を患い亡くなったことになっているが、『西廂記』にはそうした記述は見られない。だが見方を変えれば、それだけ張生が色恋を代表する人物としてよく知られていたことになろう。

ところで、本曲がどのような場面で歌われるのかについて、亀井昭陽が書いた「送一圭上人序」に次のような記述が見られる^[25]。

余每把酒、必請上人拊絲。一日醉甚、坐者解曲中義。北海敦礼学、不喜詞藻。說「二人房中」曰、「不是双女、必両男。」余笑曰、「以『三礼』談小曲、不知西房乎東房乎。」

余酒を把る毎に、必ず上人に絲を拊さんことを請ふ。一日酔ふこと甚し。坐する者、曲中の義を解く。北海礼学を敦くするも、詞藻を喜ばず。「二人房中」を説きて曰く、「是れ双女ならずんば、必ず両男なり」と。余笑ひて曰く、「『三礼』を以て小曲を談ずれば、西房か東房かを知らず」と。

昭陽は酒を飲むたびに、荷塘に月琴を演奏させた。そこ

ではなく、『西廂記』であるという江戸後期の人々の認識が窺える。さらに、『花月琴譜』編者の亀齡軒斗遠は、『華月帖』にも「漳州曲」を収めている。

天保七年（一八三六）に刊行された『華月帖』は^[26]、影絵による春画の間に斗遠や、賀茂季鷹、大田南畝などの文人の和歌、和文を載せた、大型の折帖である。その中に、右の「漳州曲」は「月琴譜」という名で収録されている。中野三敏氏の考察によると、斗遠は上京する際、これを土産として人に贈ろうとした^[27]。実際に誰かに贈ったのかどうかは分からないが、文人墨客との交遊を好んだ斗遠は、『華月帖』を多くの文人に贈ったと考える。また『華月帖』では、「漳州曲」が男女の情愛をうたう唯一の明清楽として収録されていることから、当時『西廂記』故事に見られる張生・崔鶯鶯の密会は、男女の色恋を代表する話の一つであったと考えられる。

「漳州曲」は、『花月琴譜』が収める一節の他、さらに二節の存在が確認できる。中井新六編『月琴楽譜・亨』に次のようにある^[28]。

紗帳裡飄蘭麝、哨^マ、我負慣把簫吹。玉臂忙搖、金蓮高擧。南々燕々嚙嚙鶯聲、好似君瑞過鶯娘。
春天桃李開、暖^マ、鴛鴦戲水蝶迷花^マ、多情郎、跳過粉牆折一枝^マ、並不怕被人罵^マ。
春來百花開、暖^マ、情郎不是愁更添^マ、也想思、情郎永是去奴去^マ、早還奴香羅怕^マ。

で、ある日の酒盛りで門人の村北海は曲中の「二人房中」という言葉の意味を儒学の知識を用いて説明しようとした。そのことばはまさに、前掲した「剪剪花」の第二節のものと同じである。

次に、「漳州曲」について見てみよう。この曲については現在のところ別名は見つかっていないが、『花月琴譜』に、次のような一節が収められる。

紗帳裡飄蘭麝、^マ、我負慣把簫吹。玉臂忙搖、金蓮高擧。喃喃燕々嚙嚙鶯聲、好似君瑞過鶯娘。

男女の情事をうたう本曲には、張生と崔鶯鶯が密会する場面が喩えに用いられている。また、それと似ている表現は『金瓶梅』第十三回にも見られる^[29]。

灯光影裏、鮫^鱗帳中、一箇玉臂忙搖、一箇金蓮高擧。一箇鶯聲嚙嚙、一箇燕語喃喃。好似君瑞過鶯娘、猶若宋玉偷神女。

現在鹿児島大学附属図書館玉里文庫所蔵の『金瓶梅』は文政・天保年間に作られた『金瓶梅』の訳注である^[30]。中では、この一段落に対し、「西廂記二張生名珙、字君瑞。鶯娘トハ崔鶯ヒノヲ也。可見コノ一段『西廂記』ニヨツテ作リシヲ。」という欄外注が付されていることから、張生と崔鶯鶯と言えば、まず思い浮かべるのは「鶯鶯伝」

第二節はおそらく「張生跳牆」の故事を踏まえる。「はじめに」で取り上げた塚原康子氏による各曲の出現頻度の調査から、「月花集」と「漳州曲」は「茉莉花」ほどよくは歌われていなかったと思われるが、男女の密会をうたう曲として風雅の場で人々に楽しまれていたと言えよう。

おわりに

ここまで、『西廂記』故事を含んだ曲の共通点及びこれらの曲が江戸時代における受容問題について考察してきた。その結果、『唐話纂要』に収録される「張君」以外に、全ての曲に張生と崔鶯鶯の密会を取り上げるパリエーションが存在することが分かる。中でも、特によく歌われるのは、張生が崔鶯鶯に会うために壁を越える場面であることが分かった。

明清楽は長崎の唐人屋敷に出入りを許されていた唐通事や丸山の遊女などを通じて普及した。中でも、江戸後期に流行し始めた「茉莉花」、「月花集」、「漳州曲」は、酒宴や月見の場で歌われた。それらが文人墨客の遊び心に溢れる春本に引用されている背景には、当時の知識階級と庶民階級いずれにも『西廂記』故事がある程度知られていたことがあると考えられる。

『西廂記』は唐通事をはじめとする知識階級の教科書の一つとされており、遠山荷塘が開いた『西廂記』の講義には、朝川善庵や大窪詩仏などの名高い文人が出席し

ていた。また、大田南畝は『西廂記』の典故を自身の詩作に取り入れたほか、「文鮮花」の曲も書き記しており、菊池五山や田能村竹田は、詩文の中に自身が『西廂記』を読む様子を描いている^[21]。当時の文人たちが『西廂記』に情熱を傾ける様子が窺える。

一方庶民階級には、実際に『西廂記』を目にしたことのある人がどれほどいたかは分らないが、江戸時代に大変人気であった艶本によって、その物語を知ることができたと思われる。

文政三年（一八二〇）刊の『秘戯艶説筑紫琴』の序文に、明・張楷『蒲東崔張珠玉詩集』所収の「鶯生雲雨会」が引用されていることは、既に拙稿「江戸における『西廂記』の伝来とその受容について」で述べた^[22]。このほか、溪斎英泉が編集した『枕文庫二編・下之巻』の見返しには次のような詩が書かれている^[23]。

偶蕩春心恨誤爲 偶たま春心を蕩かして誤りて為すを

恨み

悔來今日強辞推 悔ひ来りて今日強ひて辞推す

暗思往事顔空慘 暗かに往事を思ひて顔空慘にして

倘幽幽情話怎回 倘し幽情を問はるれば 話怎で回さ

對鏡欲粧猶腩腆 鏡に対かひて粧はんと欲するも猶

捲簾將步又徘徊 簾を捲きて將に歩かんとするも又

ほ腩腆にして

な お、今回考察を行う過程で、同じ曲でも譜本によつて表現や発音が違う箇所が多く存在することに気付いた。このことは今後の課題にしたい。

注

[1]『中国学研究論集』第三十四号（広島中国文学会、二〇一六）所収。

[2]楊桂香「明清楽―長崎に伝えられた中国音楽―『お茶の水音楽論集』第二号、二〇〇〇）、「沖繩と長崎における中国音楽の受容と変容―打花鼓を曲例として―」、『お茶の水音楽論集』第五号、二〇〇三）。中尾友香梨『江戸文人と明清楽』（汲古書院、二〇一〇）。

[3]「茉莉花」を含め、譜本によって、同じ曲は違う曲名が付けられている場合がある。詳細については、また後述する。

[4]塚原康子「十九世紀の日本における西洋音楽の受容」（多賀出版、一九九三）第五章「江戸後期から明治期にかけての明清楽の音楽活動」を参照。

[5]早稲田大学所蔵『唐話纂要』巻五（出雲寺和泉掾、一七一八）「小曲」を参照。

[6]ちなみに現在、これらの曲は長崎明清楽保存会や愛好家たちによって伝承されているが、楊桂香氏によると、彼らの歌う「茉莉花」では『西廂記』との関係が意識されなくなっているという（前掲注「2」論文「明清楽―長崎に伝えられた中国音楽」）。

た徘徊す

沈吟羞向花前去 沈吟して花の前に向かひて去るを

羞ぢ

隨侍紅娘再四催 隨侍の紅娘 再四催す

正徳三年（一七一三）に刊行された『蒲東崔張珠玉詩集』所収の「鶯羞慙不行」と^[24]、特に文字の異同は無い。鶯は張生と男女の契りを交わした後、召使いの紅娘から、このことを老夫婦に打ち明けて張生との結婚の許しを得るようにと言われた。だが彼女は、張生と密会したことを恥ずかしく思い躊躇する。『枕文庫』第一輯について、田野辺富蔵氏は「この本の出現は、早天に慈雨のごとく、空前のベストセラーとなり、続編を求める者が多く、出版元青林堂のドル箱となつて、文政五年より天保七〇九年にかけてシリーズで十冊近く刊行された。」と述べている^[25]。このように、『枕文庫』シリーズは当時多くの人によって読まれていた。さらに、江戸時代の性風俗を描いた艶本に『蒲東崔張珠玉詩集』がしばしば引用されていることから、『西廂記』故事は、男女の情事に関する物語というイメージが定着していたと考えられる。それはちやうど、「茉莉花」、「月花集」、「漳州曲」に歌われる『西廂記』故事の場面と一致する。そうした認識が広く共有されていたことも、明清楽に『西廂記』故事に関する曲が少なからず存在し、かつ幅広く人々に親しまれた理由の一つと言えよう。

[7]王三慶主編『日本漢文小説叢刊』第一輯第四冊（台湾学生書局、二〇〇三）所収『太平記演義』を使用した。

[8]唐通事が中国語学習にあたって使用する教材や手順などに関しては、武藤長平『西南文運史論』「鎮西に於ける支那語學研究」（岡書院、一九二六）が詳しい。

[9]『大田南畝全集』第十卷（岩波書店、一九八六）所収。

[10]例えば、亀齡軒斗遠の『花月琴譜』（出版者不明、天保年間刊行）や大島秋琴の『觀生居月琴譜』（陶陶隅田鄰、一八六〇）は「含艶曲」に、中井新六が編纂した『月琴楽譜・元』（群仙堂、一八七七）は「抹梨花」に、岡本純の『月琴雜曲 清楽の葉』（井ノ口松之助、一八八八）は「茉莉花」に作る。

[11]『綴白裘』第六集（王秋桂主編『善本戯曲叢刊』第五輯所収、台湾学生書局、一九八七）巻一「花鼓」には次の九節が収められる。

〔花鼓曲〕好一朵鮮花、好一朵鮮花、有朝的一日落在我家。你若是不開放、對着鮮花兒罵。你若是不開放、對着鮮花兒罵。

〔又〕好一朵茉莉花、好一朵茉莉花、滿園的花開賽不過了他。本待要採一朵帶、又恐怕看花的罵。本待要採一朵帶、又恐怕那看花的罵。

〔又〕八月裡桂花香、九月裡菊花黃、勾引得張生跳過粉牆。好一個崔鶯兒就把那門兒上、好一個崔鶯兒就把那門兒上。

〔又〕哀告小紅娘、哀告小紅娘、可憐的小生跪在東牆。你若是不開門、直跪到東方兒亮。你若是不開門、直跪到

東方兒亮。

〔又〕豁喇^レの把門開、豁喇^レの把門開、^レ開の門來不見了張秀才。你不是我心上人、倒是賊強盜。你不是我心上人、倒是賊強盜。

〔又〕誰要你來瞧、誰要你來瞧。^レ來瞧去、丈夫知道了、親哥^レ在刀尖上死、小妹子兒就懸梁吊。親哥^レ在刀尖上死、小妹子就懸梁吊。

〔又〕我的心肝、我的心肝、心肝の引我上了煤山。把一雙紅繡鞋揉得希腦子爛、把一雙紅繡鞋揉得希腦子爛。

〔又〕我的哥^レ、我的哥^レ、哥^レの門前一條河。上搭着獨木橋、叫我如何過。上搭着獨木橋、叫我如何過。

〔又〕我也没奈何、我也没奈何、先脫了花鞋後脫裏脚。這多是爲情人、便把那河來過。這的是爲情人、就把河來過。

〔12〕『花月琴譜』(同前掲注〔10〕)と『觀生居月琴譜』(同前掲注〔10〕)には次の二節が書かれている(『觀生居月琴譜』には、工尺譜のほかに、歌詞にカタカナで書かれた発音が付されているが、ここでは省略する)。

好一个抹梨花^又、滿園的花兒開賽也不過他。本待的一枝、又恐怕裁花人罵呀。

好一朵杜鮮花^又、有朝的有日落在我家。本待早出門、又恐怕鮮花那兒落^三。

一方、太田連の『清樂雅唱・乾』(籙木七五郎等、一八八三)には、次の十三節が書かれている(工尺譜に加え、歌詞にカタカナで書かれた発音が付されているが、ここでは省略す

る)。

好一个茉莉花^又、又、滿園的花兒開賽也不過他。本待要採乙枝、又恐怕看花人罵呀、又。

好一朵杜鮮花^又、有朝的有夕落在来我家裡。本待要不出門、又恐怕鮮花兒落呀、又。

□(筆者注…八の欠字か)月裡桂花香、九月裡菊花黃、勾引的張生々跳过粉牆来。好一个雀鶯々忙把門關兒上了呀、又。

哀告小紅娘、又、可怜的小書生跳着半夜裡。你若是不開門、我就跪到東方日亮呀、又。

慌忙把門開、又、々了的門開兒□(筆者注…不の欠字か)見有人来、你那裡是何人、□(筆者注…敢の欠字か)則是強賊来々盜呀、又。

今日又来瞧、明日又来瞧、々来的瞧了去。哥你知道了、你那裡去到懸樑、奴這裡無梁去吊呀、又。

我的愛哥々、又、哥々的那門前、隔了一條可。脚踏着獨木橋。叫□(筆者注…奴の欠字か)家如何得得过呀、又。

我的心奈何、又、攝緊着花鞋、走将过那河。好一个有情郎、急忙忙手兒来扶呀、又。

我的心肝生、又。為着的我心肝、走过几重山。本待要會情郎、又恐怕爹和娘来到呀、又。

雪花兒被風飄、又、飄了的飄了去、三尺餘高飄。好一个雪美人、怎比我冤家俊臉呀、又。

錦扇兒光上、又、寫着的好詩句、到有兩三行。本待要送情郎、又恐怕傍邊人取笑呀、又。

く卷二「復山士繁書」に「琴客安於草堂、悉曇与夏音並遊。

『茉莉花』、『到春来』、『算命』、『九連環』、入月琴、胡琴、鏘と盈人耳。妻琴、炊婢亦學口、草堂變為唐人窠窟。(琴客草堂に安んじ、悉曇と夏音と並び発す。「茉莉花」、「到春来」、

「算命」、「九連環」、月琴、胡琴に入り、鏘鏘として人の耳に盈つ。妻琴、炊婢も亦た口に学び、草堂 変じて唐人の窠窟と為る。)とある。

〔18〕『昭陽先生文集初編』卷二(『龜井南冥昭陽全集』第八卷下所収、葦書房、一九八〇)「送一圭上人序」に「先人既没、余作小説体一卷藏焉。上人為余夏音説之、揚眉称善曰、『邦人為是、非用話錯、則入口銜骨已。』余固不知夏音、得遇未曾有之人、而聞未曾有之評、恍然覺如先人之來摩余頂也。」(先人既に没し、余小説体一卷を作して焉に藏む。上人余の為に夏音もて之を読み、眉を揚げて善を称して曰く、「邦人はを為し、話を用ふること錯るに非ずんば、則ち口に入りて骨を銜むのみ」と。余固より夏音を知らず、未だ曾て有らざるの人に遇ふを得、而して未だ曾て有らざるの評を聞き、恍然として先人の来りて余の頂を摩するが如きを覚ゆるなり。)とあることから、昭陽の小説に対する興味が窺える。

〔19〕荷塘の著作について、「荷塘道人圭公伝碑」に「著書滿家、率未卒業。其僅脱稿者、『北西廂記注釋』、『月琴考』、『胡言漢語考』數部耳。」(著書家に滿つるも、率ね未だ業を卒へず。其の僅かに脱稿するは、『北西廂記注釈』、『月琴考』、『胡言漢語考』數部のみ。)と書かれている。一方、『嬉娥清韻』の「月琴」では、月琴の歴史や形状等について詳しく考証が

我的嬌姑娘、又、你會手彈琵琶、我會吹簫兒。簫兒在口中吹、琵琶在膝兒上抱彈呀、又。
吹呀吹得好、又、吹彈得唱歌好、人都知道了。本待要再吹彈、又恐怕知音贅来呀、又。

〔13〕『大田南畝全集』第六卷(岩波書店、一九八八)所収。

〔14〕日野龍夫氏は「南畝の漢詩文(四)」(『大田南畝全集』第六卷所収、岩波書店、一九八八)の中で、「序者の張敬修、跋者の錢徳は、南畝が文化元(一八〇四)―二年の長崎出張中に親しく交わった清人で、『南畝集』には張秋琴、錢位吉の呼称で頻出する。この兩人の序・跋はともに『乙丑』(文化二年)付けで、本書刊行より十五年も前、まさに南畝の長崎滞在の中に書かれたものである。ということは、本書が刊行より十五年も前にすでに一応出来上っており、南畝が閑暇の折に修正を加えたりする必要上、その稿本を長崎へ携行して、たまたま知り合った兩人に見せて序・跋を乞うたということであろうか。張敬修の序の『先生復た生平の著述を將て纂輯して稿を成し、郵筒もて遺示す』という一節は、そのことを裏付けるかのようにある。」と指摘している。

〔15〕『昭陽先生文集』(九州大学石崎文庫蔵)卷二「復山士繁書」。

〔16〕前掲注〔15〕書卷二。
〔17〕前掲注〔15〕書卷二「與岡子究書」に「豚兒學夏音、『韻鏡』、女孩學小曲、宰北海學悉曇、門生亦歌『茉莉花』、『九連環』。一畝之宮、殆變於夏。」(豚兒 夏音、『韻鏡』を学び、女孩小曲を学び、宰北海 悉曇を学び、門生も亦た「茉莉花」、「九連環」を歌ふ。一畝の宮、殆ど夏に変はる。)とあり、同じ

なされており、「主按」等の荷塘が付した評語が見られる。そのため、『嫦娥清韻』は朝川善庵が「荷塘道人圭公伝碑」で言及する『月琴考』のことではないかと想像される。なお、このことについては別稿で詳しく論じたいと思う。

[20]「工尺譜のほかに、歌詞にはカタカナで書かれた発音も付されているが、ここでは省略する。なお、工尺譜の最後のところには、双行細注で書かれた「初句二疊、『本待』以下又二疊、下倣之。」(初句二たび置し、「本待」以下又た二び置し、下之に倣ふ。)という十四字が見られる。

[21]本節の末尾に、小さく書かれた「初句無疊」(初句 疊すること無し。)の四字が見られる。

[22]朝川善庵『楽我室遺稿』卷三(『崇文叢書』第二輯之五二三)所収、崇文院、一九三二)「荷塘道人圭公伝碑」に「年三十一、始來江戸。寓於本所、與余居相距不甚遠。故余知師最先。余與大窪行、宮澤雉諸友設席延致、受『西廂』『琵琶』二記。先是江戸文人無精於傳奇者。何況詞曲乎。若摘月琴者、絶不見其人。而師兼能之、竟以是名家。人亦以是稱之。」(年三十一にして、始めて江戸に來たる。本所に寓し、余の居と相ひ距たること甚だしくは遠からず。故に余師を知ること最も先たり。余大窪行、宮澤雉諸友と席を設けて延致し、『西廂』『琵琶』の二記を受く。是れより先江戸の文人に伝奇に精しき者無し。何ぞ況んや詞曲をや。月琴を摘するが若きは、絶えて其の人を見ず。而るに師兼能て之を能くし、竟に是れを以て名家たり。人も亦た是れを以て之を稱す。)とある。

[23]豊橋創造大学附属図書館所蔵『訳解笑林広記』(和泉屋金右

衛門等、一八二九)の奥付に「『諺解校注古本北西廂記』(元王實甫填詞、荷塘先生注譯 近刻)とあるが、結局出版できかどうかは分からない。なお、その影印本は『唐話辭書類集別卷』(長沢規矩也編、汲古書院、一九七七)に収められている。

[24]『嫦娥清韻』では「剪剪花」に、「清樂雅唱・乾」では「月花集、紅綉鞋」に、河副作十郎編『清樂曲牌雅譜』(日刊杏村書舎、一八七七)では「漳州月花集」となっている。

[25]前掲注[18]書。

[26]ここでは、鹿児島大学附属図書館玉里文庫所蔵の『金瓶梅』を使用した。

[27]本書については、徳田武「遠山荷塘と『金瓶梅』」(『日本近世小説と中国小説』所収、青裳堂書店、一九八七年)、井上泰山「高階正異訳『金瓶梅』覚書」(『中国俗文学研究』第十一号所収、中国俗文学研究会、一九九三)、川島優子「江戸時代における白話小説の読まれ方―鹿児島大学付属図書館玉里文庫蔵『金瓶梅』を中心として―」(『中国中世文学研究』第五十六号、中国中世文学会、二〇〇九)に詳しい。

[28]出版者不明、一八三六。

[29]中野三敏「亀齡軒斗遠の後半生―天保の風流―」(九州大学文学部『文学研究』第八十七輯、一九九〇)に、「本書を季鷹東下りの手土産とする説が出たわけだが、その署名はまぎれもなく『亀齡主人』の朱印を用いていて、東下りの主は季鷹ではなく、斗遠であることを証明している。」とある。

[30]群仙堂、一八七七。

[31]田能村竹田「與大窪天民」(『田能村竹田全集』文集所収、

国書刊行会、一九一六)に「半夜酒醒夢回際、挑燈讀『西廂』、

『牡丹亭』。未嘗釋卷、浩歎才難情難也。或謂鶯々、麗娘、

並係夢中花幻中月、實無有也。夫爾。雖然、有事之可見、詩之可證、心目相接、的見其人。」(半夜 酒醒めて夢より回る際に、灯を挑けて『西廂』『牡丹亭』を読む。未だ嘗て巻を釈

き、才の難く情の難きを浩歎せざるなり。或いは鶯々、麗娘、並びに夢中の花幻中の月に係り、実に有る無しと謂ふなり。

夫れ爾り。然りと雖ども、事の見るべき、詩の証すべき有り、心目 相ひ接し、的に其の人を見る。)とある。また、菊池五

山『五山堂詩話』(山城屋佐兵衛、一八二四)巻一に「余十年以前作詩、開口便落婉麗、絶不能作硬語。嘗有『畫簾半捲讀西廂』之句。為人所誦。」(余 十年以前詩を作るに、口を開けば便ち婉麗に落ち、絶へて硬語を作す能はず。嘗て「畫簾半ば捲きて西廂を読む」の句有り。人の誦する所と為る)とある。

[32]前掲注[1]。

[33]国際日本文化研究センター所蔵『枕文庫二編・下之巻』を参照。

[34]東京大学東洋文化研究所蔵『浦東崔張珠玉詩集』(村上清三郎等、一七二二)。

[35]『医者見立て英泉『枕文庫』』(河出書房新社、一九九六)。